Ⅱ　コミュニケーション論からみたスポーツの社会史

１９８３年春季箱根研究合宿報告

— １９８３．４．３〜４ —

報　告：(1)　コミュニケーション論とスポーツの社会史－物質・エネルギー系と情報系－　唐木　国彦

(2)　コミュニケーション論からみたスポーツ社会史　伊藤　高弘

参加者：早川武彦，高津勝，内海和雄，上野卓郎　藤田和也，山本唯博，坂入明，柴崎涼一　渡辺富子，神宮美智子

(1)　コミュニケーション論とスポーツの社会史 — 物質・エネルギー系と情報系 —

唐木　国彦

はじめに

コミュニケーションは人間の相互作用過程である。送り手から受け手へと一定の伝達手段を用いて人間の精神内容を伝達することによって，両者が意味のある関係で結ばれる。人間が社会的生活を営むかぎり，あらゆる場面でコミュニケーションが結ばれる。

スポーツにおいても，この人間関係が技術的，組織的な基礎をなしており，コミュニケーション過程とその結果がスポーツの価値を決めるといってもいいすぎでない。また，スポーツが社会の人間関係を反映して，それぞれの時代に応じた形式と内容を刻印されるものと考えると，社会発展とスポーツとの関連を究明するさいにもコミュニケーション概念はキー概念のひとつになりうる。

ところで，現代社会において，もっともめざましく発達したのは，マスコミュニケーションというコミュニケーションの方式である。一時に大量の内容を多数に伝達する手段が開発されたことによって，労働過程ばかりでなく，あらゆる社会生活の領域に影響をおよぼしつつある。スポーツもまた，マスコミュニケーションによって多くの人々を参加へと動機づけ，観戦する人々を増大させ商業ベースでのスポーツ活動を促進させることになった。

科学技術の発達はこうした伝達手段を開発したばかりでなく，伝達される内容，つまり情報を蓄積，加工し処理するコンピュータを出現させた。数値コントロールによるロボットが自動車製造に利用され，カラーテレビのＩＣ回路の設計にコンピュータが採用されている。さらに事務系労働にマイクロコンピュータが進出し，人間にとって代る状況が生まれているのである。

こうした「メカトロニクス革命」あるいは「情報社会化」といわれるこの２０年来の科学技術の発達は，政治，経済，文化の領域に大きな変化をもたらし，スポーツのあり方にも変化をおよぼすはずである。

昨年の報告で私は，スポーツを国家史，制度史の観点から把握する従来のスポーツ史の一面性を指摘して，「日常生活の文化」という社会史の視点をもちこむことの可能性を検討した。そのことによって，戦前の労働者スポーツ運動から現代の国民スポーツにいたる主体の一貫性を明らかにすることができると考えたからである。しかし，主体の側の一貫性は，そこで行なわれるスポーツの様式，内容，意味づけの一貫性を意味するものではない。文明史の大きな流れのなかで「日常生活の文化」は変っていかざるをえない。そこで今回の報告では，コミュニケーションという視点からスポーツの様式，内容，意味の変化をとらえなおすことをねらって，その準備的な考察をしておきたい。

1. 情報，システム，コミュニケーション

産業革命の象徴は蒸気機関であった。機械の導入により，単位時間当りに投入できる原料とエネルギーが飛躍的に増大し，旧来の労働過程では考えられない程の大量生産が可能になった。人間の欲望もこれに応じて拡大，変質し，スポーツのような文化を発展させる物質的な条件をつくりだしたのであった。

この機械化の時代に生産力の増大を支えたのは科学技術の発達である。一方において，物質の物理化学的な法則をはじめとする自然の仕組みが科学的知識として集積され，他方においてその知識を利用して一定の物質とエネルギーを無駄なく合理的に生産物に転化させる技術学が発達した。資本主義的な市場において優位をしめるには，なによりも科学技術を駆使した安価で大量の生産が必要であり，科学技術は利潤の起爆剤として不可欠であったのである。

現代の資本主義社会においても生産性と利潤確保のために科学技術が必要とされている点は変りがないが，その科学技術の発達そのものが人間の認識に独自な世界を開かせるにいたった。それは，情報あるいはシステム論の世界である。産業革命の象徴が蒸気機関であるとすれば，この新たな地平線を拓いたのはコンピュータである。物質とエネルギーの合理的，経済的な転用を生産物の増大と直接結びつける場合にも情報やシステムは存在した。つまり，機械体系をつくり，作動させ，所期の成果を得るために，情報的契機が必要ではあった。

しかし，コンピュータの出現は，そうした諸情報を機械体系から離れて独自に処理することを可能にしたのであった。労働過程や社会過程をモデル化して，プログラム操作によって仮説的に情報過程に乗せることができるようになったのである。

板倉達文は，この情報技術のもたらした新たな世界の出現を機械時計の発明とのアナロジーでつぎのように説明している。１４世紀に機械時計が発明される以前には，物理的時空間をあらわす「時」という概念は，「感覚的・具体的事物に固着した形で表象されるか，あるいは，散漫な諸印象の経過の中で自覚されえないままにとどまっていた」。当時の人間にとって日時計，作物時計あるいは「腹時計」が時間の経過を伝えるものであった。ところが，機械時計が出現すると，季節，日照，生理現象のいかんにかかわらず，修道院，教会，市役所の塔から一斉に時刻が告げられ，人々はそれに合わせて生活するようになる。人々は，「時間を勘定し，生活の流れの中で時間を割り振る態度を習慣化させた」のである。このことは，時間を定めた人間関係を厳密なものにし，社会制度全般に影響をおよぼすとともに，近代科学の精神を生むことになったという。つまり，「感覚的世界を離れた，抽象的な世界を実感する」ことにより，科学の世界に到達する道がひらけたのであった。コンピュータは，この機械時計のように，具体的な労働過程や生活過程に含まれていた情報的契機を分離し，抽象的な数字的記号のあいだの関係として把握することを可能にしたのであった。

さらに板倉によれば「いったん情報概念が成立し，技術的全体を有するようになるとき，情報過程という概念は……人間的世界における通信，伝達，また会話といった過程の分析のみならず，物理化学的世界をも情報という観点からみかえさせる」というように，自然，人間，社会についての分析の視点に情報的契機を持ち込むことを可能にする。スポーツの社会史をコミュニケーション論から検討してみようと私が考えたのは，こうした情報過程として「日常生活の文化」を見直したら，スポーツについての科学的認識がどのようなパースペクティブを持って拡大しうるかということを考えてみたからであった。

2. 情報概念からみたスポーツ

情報とは何かという説明で比較的わかりやすいのは，シャノンの「負のエントロピー」という規定である。すなわち，熱力学の第二法則によると異なる熱エネルギーをもった二つの分子群を混合した場合，両者が混ざり合って分子間の混沌と無秩序が増大していく方向をたどり，再び二つの分

子群に分かれる方向をとることはない，という法則がある。この混沌と無秩序の増大の度合をエントロピーという。情報は，エントロピーとは逆に自然や生体の組織性，秩序性の度合をあらわす概念であるから，「負のエントロピー」ということができる。これがシャノンの説明である。

つぎにこの情報概念をコミュニケーションという場面にあてはめてみよう。送り手と受け手とのあいだで伝達される内容は，「負のエントロピー」が大きいほど的確に意味を伝えることができ，伝達の目的を遂げることができる。

では，スポーツとのかかわりはどうであろうか。さしあたり，スポーツ技術が問題になる。従来のトレーニング論では，スポーツ技術を向上させるために一定の体格を備えている者の筋骨格系のエネルギー出力を増大させるトレーニングとそのエネルギーをできるだけ効率的に使用するトレーニングが主として問題にされてきた。いわば，馬力とフォームが中心となってきたのである。したがって，スポーツ技術を規定する場合，生産における労働手段体系説とのアナロジーでスポーツ技術を用具，施設などの物的な諸手段の体系としてとらえることができた。

しかし，ルールや作戦，戦術はどうするかということになり，これも手段にはちがいがないから体系のなかに含めようということになり，物質的な手段と非物質的な手段とを合わせて同次元で体系を枠づけざるをえなくなっている。こうなると生産労働とのアナロジーで出発したはずのスポーツ技術の規定がすこぶるあいまいなものになってくる。すなわち，人間の身体も手段ではないか，技能は手段であるのかないのかという話しになってくる。

私の考えでは，スポーツの技術は労働とはちがって物的な生産物を生み出さないから，人間の能力を表現する物質・エネルギー系の手段（道具，用具，装備，施設など）と情報系の手段（ルール，作戦，戦術など）との二重二層構造をもっており，後者にスポーツがスポーツとして存在する要因が認められると思う。すなわち，情報系の手段は物質・エネルギー系の手段を組織化し，目的にそって物質・エネルギー系の手段を組織化し，目的にそって秩序化するだけでなく，それ自体として集積され加工され，処理される対象として発展してきたのではないかと考えるのである。しかし，それは物質・エネルギー系の手段のもつ可能性に条件づけられた枠内のことであることはいうまでもない。

こうした情報概念とスポーツ技術との関連をシステム論，サイバネティクスの観点からとりあげたスタインブルナーの「決定過程のサイバネティック・パラダイム」について，山川雄己はつぎのような紹介をしている。「スタインブルナーによれば，行動主体はいつでも合理的選択モデルが仮定しているような仕方で情報を処理して行動の方向を決定しているわけではない。……たとえばテニスをしているプレイヤーの行動を考えてみよう。プレイヤーたちは，相手のボールを打つとき，合理的選択モデルが想定しているような情報処理をするのであろうか。ボールは角度，高低，速度，回転などにおいて異なり，これらの理論的組み合わせは天文学的な数字になるであろう。……プレイヤーは，分析的な思考によって身体を動かすのではなく反射的動作の一定のレパートリーをもっていて，若干のフィードバック変数をモニターしている。この高度に焦点の絞られた感受性に入射する情報への反射的継起としてルーチン化された動作が実行されるのである」。

テニス，卓球，柔剣道など対面して行なうスポーツ種目では，こうした情報論的技術論をさらに具体化していけば，カン，コツや精神主義に頼っていた技能部分が客観的な技術に導入できる可能性がありそうである。集団のボールゲームでは個人の動作が重複しているから，さらに複雑さを増すであろうが，情報論の領域において検討することは不可能ではない。

スポーツの組織論においても情報・システム論を採用する余地は大きい。スポーツ運動の推進母体としてのクラブ，連盟などが，構成員のスポーツ活動を保障し，全体としてスポーツを発展させる機能を発揮するかどうかはすぐれて現代的な問題となっている。もし，クラブなり連盟などを，

スポーツを人間のために発展させる目的をもったひとつのシステムであると考えることができるとすれば，そのシステムと外部環境（政治，経済，軍事など）との相互作用とシステムにおける相対的に自立した決定過程の仕組みを解明できるのではないかと思われる。

まとめとして今回のテーマはつぎの諸課題にせまる第一段階であることを確認しておきたい。

① 人間がスポーツを習得するさい，人間の内部にいかなる生理的・心理的な情報処理が行なわれているのか。

② スポーツ技術はいかなる要素が組織されたものであり，それらがいかなる秩序性をもったとき有効な技術になりうるのか。

③ スポーツ組織はひとつの有機システムとしてどこまで自律性を確保できるのか。

④ スポーツには，それぞれの時代の情報処理，伝達能力の総体がどのように反映されているのか。

これらの課題を究明していくには，さらにスポーツにかかわる時間・空間についての概念的な研究が必要であると思われるが，今回は触れることができなかった。

(2) コミュニケーション論からみたスポーツの社会史

伊藤　高弘

1

今回の報告は，ここ数年来執拗に続けられてきている対象としてのスポーツの本質的・構造的把握をめざす研究の一環をなすものである。しかしながら，この研究の深化・発展のための方法論が未確立といってよい状況にあり，今回の報告も方法論確立のための一つの模索にすぎないことを卒直に告白せざるをえない。たまたま，１９８２年１２月２７日，私の所属する学校体育研究同志会の浜松大会で「スポーツのルールと時・空間の関連」と題して特別報告の機会を得たのであるが，この報告要旨については別途にまとめて発表した。1)この浜松大会時の報告が，今回の報告の基礎となっているのであるが，紙数の関係で簡単に紹介しておきたい。

浜松報告は，スポーツ上の諸変化 ― たとえば，ルールの統一，全国組織の確立などがスポーツ外的，すなわち社会における通信・交通・運輸などコミュニケーション体系の革命的変化に規定され，そこで生起した新しいスポーツ上の諸変化がコミュニケーション体系の発展をうながす，ということを実証することにあった。具体的には，スポーツの組織化と連合王国内のグリニッジ標準時採用との時制の一致を示したものである。

この浜松報告後,2)今回の報告までに若干の検討を加えた参考文献は，以下の通り。

1. 阿部生雄「エリート教育とスポーツ」『世界教育史大系３１』（講談社，１９７５）
2. 布施善克「イギリスの体育・スポーツとナショナリズム」『スポーツナショナリズム』（大修館書店，１９７５）
3. 中村敏雄『スポーツの風土』（大修館書店１９８１）
4. 加藤秀俊「空間の社会学」１９７６『加藤秀俊著作集５時間と空間』（中央公論社1981）
5. 佐藤　毅『現代コミュニケーションの理論』（青木書店，１９７６）
6. 福田静夫『自然と文化の理論』（青木書店，１９８２）

(註.1) 拙稿「スポーツのルールと時・空間の関連」『たのしい体育・スポーツ春５』(1982.3.1)

2) この報告の軸に，菅原礼編著『スポーツ規範の社会学　ルールの構造分析』（不味堂，１９８０）を置き，W．シベルブシュ『鉄道旅行の歴史１９世紀における空間と時間の工業化』（法大出版局，１９８０）と荒川　弘『近代科学技術の成立』（北大図書刊行会，１９７３）を参考にした。

2

今回の報告の視点は，私にとっては２０年前の青年教師時代にめばえていたものであったが当時

の問題意識を再現してみると「スポーツあるいはスポーツ集団を静的に把握し ― 人間の置かれている歴史的・経済的・社会的条件との相互関連でとらえることが（既存の体育社会学研究では ― 伊藤）欠けていた。」3)気負いこんだ批判を加えている。そのご哲学，社会学，社会心理学，科学史などの諸研究の息吹きと成果に触れることによって，再燃してきたのである。

さて，本報告が対象とする時期は1840～90年の50年間である。この半世紀の間に，地域的，分散的に行なわれていたサッカー ― ロンドン市近郊とパブリックスクール，大学中心の時代から急速にイングランド全体に，そして連合王国の統一ルール・組織化へと発展するのである。この変化・発展の基礎には鉄道敷設をもってその幕をとじるイギリス産業革命の進行があった。したがって，社会的コミュニケーション（通信，交通，運輸）革命としての産業革命が，人間，生活，社会にあたえた衝激は中世的世界の終焉を意味するほどのものであった。このドラスティックな変化は人間の時間，空間感をゆさぶり，崩壊させ，やがては，新しい秩序，体制へと志向させるものであった。

前掲の先行研究では，この産業革命はどのような位置づけが行なわれているか，その具体的な記述の一部を紹介してみよう。

布施「（組織化の ― 伊藤）急激な発展をもたらした要因の一つに交通機関の発達があった」（P78），「1878年10月14日，（電灯の発明により）ーはじめて人工照明のもとでゲームが行なわれた」（P82）。

菅原「ルールの解明には……イギリス文化の理解が（必要）」（P70−71），「これらのルール（1850～60 年代－伊藤）には『物理的時間』の規定がない。」（P81），「14世紀から産業革命以前までの英国民衆のフットボールは，成文化されたルールをもたず，ラフで野蛮なものであった。…地域ごとに異った形態……独立して発達……民衆の行なっていた荒々しいフットボールはパブリックスクールへ」（P194），「ルールの成文化は……産業革命以降の18世紀後半から19世紀」（P195）

阿部「第二次エンクロージャーと産業革命の進行は……階層分離を刺激し……プロレタリアートを生みだす」（P128）「産業革命期の交通機関の発達，都市化現象……は民衆スポーツの自然発生的で未組織な性格を変化」（P130）。

(注3) 吉崎高弘「スポーツにおけるルールをどのように考えるか」『体育グループ№17』，1962。

3

これらの先行研究の記述は，産業革命を無視したわけではない。しかしながら，産業革命 ― コミュニケーション革命でもあるが ― の変化の全貌と実体をとらえきれず，それはまた科学技術の人類史的達成という見地に立つことができなかったのである。加藤秀俊の示すところによってこのことを実証してみよう。

図1は，物理的地球には変化はないが，約1万年の間のコミュニケーション手段の変化によって，心理的には「ちぢむ地球」として認識され，行動圏は拡大することを示したものである。表1は，図1の変化をうけて100年間の国際組織と会議の増加を示したものである。20世紀初頭の国際サッカー連盟の結成はこのグローバルな変化と無縁であるのか。無縁でありえようはずがないが，この無縁の証明は，神技をもってしても不可能であろう。

上記の巨視的変化を念頭に入れて，つぎにイングランドに端を発して連合王国のサッカーへと組織化される過程と同時代の通信，交通，運輸体系の変化を図示してみよう。

図2は，交通機関の未発達時代にはコミュニケーション手段による情報交換が行なわれず，近代サッカー初期のルールが旅程2日以内のものであったことを例証しようとしたもの。図3，表3は

通信交通・運輸体系の変化を示し，これによって情報の交換と同一規準による鉄道時間，したがって連合王国全体が同一の規準（グリニッジ標準時の採用）による時間と生活によって統一されていく過程をみようとしたもの。

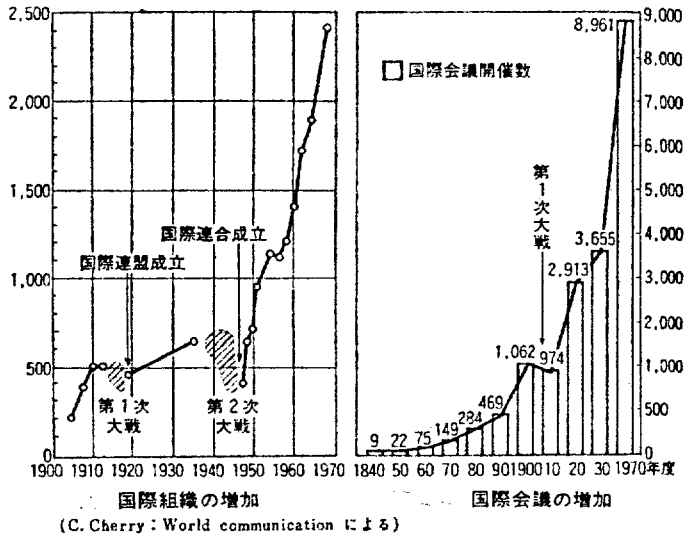
表２は，中村敏雄の提示したものであるが究明すべき核心は小池滋の示した１８４２年から１８４８年の総路線延長と年間乗客数の増大とともに，そのごの鉄道中央機関（ＲＣＨ）の設立と１８８０年の標準時採用にあったのである。それはなぜか，このことは神 ── 教会の支配し所有してきた時間が，政治・経済・社会と〔太陽系は不断の歴史的変化を続けるものとして把握され，迷信，神学的世界に衝撃を与えた〕（ホブズボーム）科学・技術の諸変化の総体によって人間が支配し所有する根本的転換の時代のはじまりのようである。中世的世界の終焉と表現した所以もそこにある。

4

コミュニケーションの立場からスポーツ現象を分析するにあたっては佐藤前掲書から多くの教示をうけた。たとえばコミュニケーションを広狭両義でとらえ，社会とスポーツのプレイ場面に適用することや，「反映」についての先駆的展開をなしとげた中井正一のハイデッガー的限界など。本稿を執筆するにあたって，そのご一，二目を通したものもある。4)しかしながら，短期間で準備したこと，冒頭におことわりをしたように２０年ぶりにイギリス関係のものへ手を入れたことなどもあって未熟な報告となったことをおわびしたい。

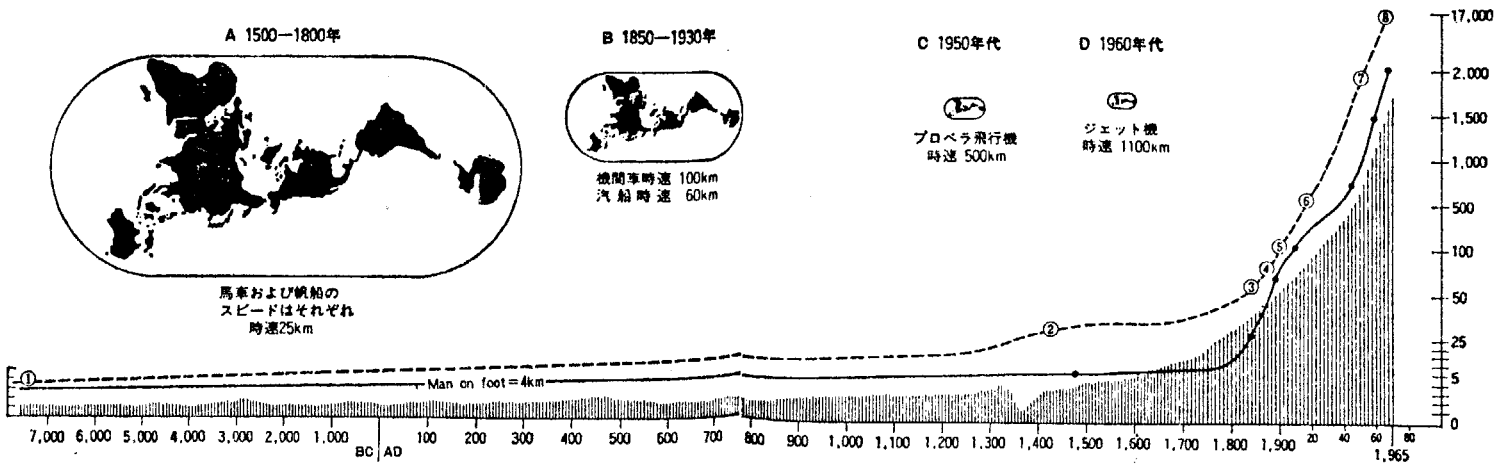
(注4) たとえば，Ｅ．Ｊ．ホブズボーム『資本の時代１８４８−１８７５ ２』(みすず書房,1982)の「この時代に ── サッカーの場合のように ── クラブをつくり，競技会を運営した中産階級の青年によって，一つの形がつくりだされた。それは１８７０年代末期および1880年代初めになってはじめて労働者階級に乗っとられたのである。」（Ｐ４２６）は興味深い。

表１



(C. Cherry : World communication による)

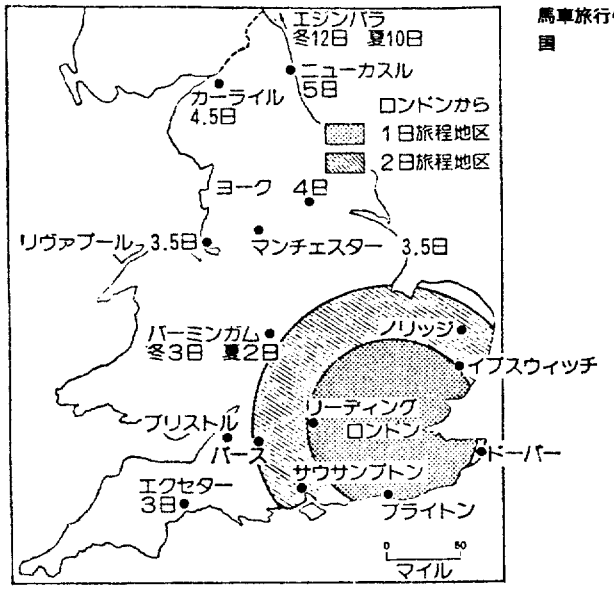
図1



ちぢむ地球(McHale, John : Future of Future による)

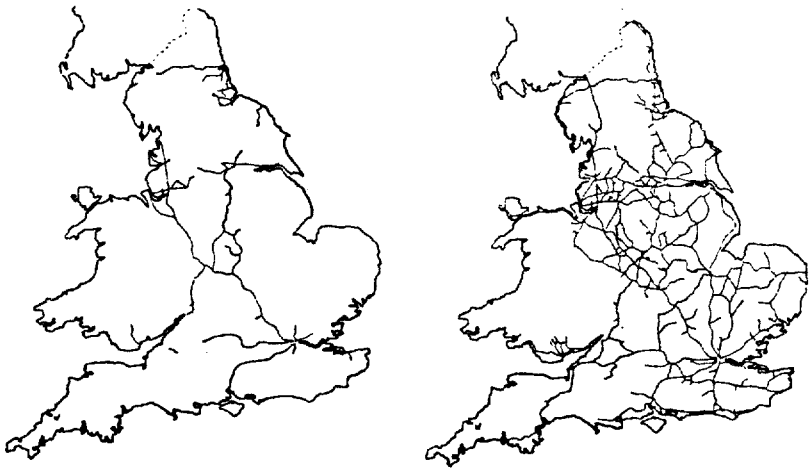
コミュニケイションの手段
①口頭・ノロシ・ドラムなど ②印刷術 ③有線電信
④電話 ⑤無線電信 ⑥ラジオ ⑦テレビ ⑧通信衛星

図 2



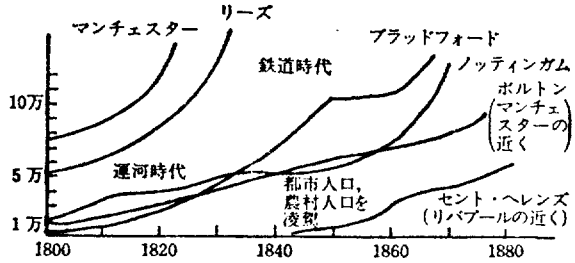
馬車旅行の時代，1750年頃の英国

図 3



1840年〔左〕と1850年〔右〕の英国の鉄道。二つの地図を比較すると，1840年には連絡のなかった数少ない線が，10年後には稠密な鉄道網に成長したのがよくわかる。

表 2



主な産業革命都市の人口増 (R.B. Jones, 1971)

表 3

イギリス全国鉄道統計（ウェイルズ，アイルランドも含む）

年度（6月30日で区切る）	総路線延長（単位マイル）	年間乗客数 総数（1マイル当り）	年間収入（単位ポンド） 総額（1マイル当り）
1842	1,875	18,453,504 (9,841)	3,820,522 (2,038)
1843	1,952	23,466,896 (12,021)	4,535,189 (2,323)
1844	2,148	27,763,602 (12,925)	5,074,674 (2,363)
1845	2,441	33,791,253 (13,843)	6,209,714 (2,544)
1846	3,036	43,790,983 (14,423)	7,565,569 (2,492)
1847	3,945	51,352,163 (13,017)	8,510,886 (2,157)
1848	5,127	57,965,070 (11,306)	9,933,552 (1,937)

〔**質疑・討論**〕

司会　スポーツを全社会史的にとらえる方向性でコミュニケーション論をお二方に提示してもらった。伊藤報告は社会全体の変化の中でスポーツの変化をとらえる。この両者の関連をみていく。先行研究，定説をも関連のある領域から整理してもらった。その際コミュニケーション論で両者の関連をみている。しかしスポーツと社会の関連を解明する前に人間と社会，人間と自然との関係でとらえることも必要だとされた。

唐木報告では日常生活の文化としての共時性との関わりでスポーツをとらえる。情報，科学技術，生産力の発展の中で共時的存在である日常生活の文化がどう変化し，あらねばないないか，スポーツの意味や価値の世界としてこれらをとらえ，スポーツの物質的媒体を明らかにする方法を検討したいと提起された。

質問として①社会史，コミュニケーション論といいながら何故情報やシステム論を持ち出したのか，またそのことと歴史との関わり合いはどうか。②日常生活の文化を社会史としてとり出すのは何故か。③昨年度研究との継続性の問題。前回は＜スポーツの社会史の可能性＞ということで従来の歴史研究における社会史をどうとらえたらよいかという方法論としてとりあげた。今回は情報論として新たな問題提起のように思われる。この関連はどうか。

さらに報告に対する感想を出してもらい質問等を合わせて討論の柱を考えていきたい。

上野　唐木報告は先端的知識，科学等多くの文

献紹介が参考になった。今後先端的科学，思想，理論研究上の成果に対する目配りをどうしていくか。近年の理論状況をどうみるか。どの点までやればよいか。文献の位置づけ，評価をどうするか。課題として，伊藤氏にも関わるが先進的理論とかかわる基本的立場，視点等基本概念をどう考えていくか。

早川　スポーツの資本戦略，政治戦略に対し，今の先端知識や状況を把握しておかないと分からなくなり，振り回される。スポーツを発展させるために今の状況では先が見えにくい。この点情報・科学の理解は必須で不可欠と思われる。唐木報告はその意味で有益。スポーツの独自の発展を見定めていくには今回の政治，経済，社会的スポーツ戦略の意図や状況を明らかにし，どんな方法でスポーツを虜にしようとしているのかをみる必要がある。結果として後にわかるのでは時すでに遅しだ。またその状況すら理解できなくなってしまう。先端技術，科学，情報を視野に入れ，他分野との多面的な展開が必要だ。

坂入　伊藤報告は社会史的捉え方で従来の定説といわれているものを別の角度からみ直すことができるのではないかという印象をもった。グーツムーツに代表される「近代体育論」―彼が学校教育として体育（操）を確立したという―観方は今村，成田氏等の指摘にあるが，もっと違った角度からみるとその理解がかわるのではないか。

唐木　先行研究では歴史的事実はそうであっても何故そうであったのか説明がない。グーツムーツが体操から体育を考えるその内的関連の分析が必要，さらにそれと外側の社会との関連もみる必要がある。そこに事実が浮き彫りになり一貫性をもって証明しうる。

柴崎　コミュニケーション論に興味をもった。スポーツを考える上でシステム論など今後研究していきたい。伊藤報告は具体的で理解できた。アメリカのものと比較していきたい。シアトルでの日系人の野球開始が1900年代始めだが，アメリカ人との交流を目的としていた。アメリカ人は多民族の移住でコミュニケーションが必要だった。スポーツはその意味で材料となった。コミュニケーション論によって，そうした事情をより明確に究明できると思う。

司会　二つの研究方向が出ている。①先端的，周辺の主導的理論状況をどう咀しゃくし，これと関連づけるか。②情報，コミュニケーションの中味の問題として歴史的事実，現代スポーツ状況をどう捉えていくか。従来の内的関連をどう堀り起していくか。

上野　もう一つ加えてほしい。昨年は全社会史的考察で捉えることで議論してきた。スポーツの社会史像は今回との関係でどうなるか。

伊藤　菅原氏は物理的時間はないとする。試合時間が何故日没までから９０分に変わったのか説明がない。ル・ゴフの「商人の時間」で考えれば鉄道が市民経済の論理と密着して可能となる。物理的時間の存在だ。しかし多くの論者は時間を問題とせず，空間だけをみる。両者の統一が必要だがそれはコミュニケーション論で可能となる。＜関連と反映＞と＜時間と空間＞の共通性は実在，物質的諸現実と切り離さず統一していくことが核心だ。菅原論はサッカーでグランドを試合時間を別々に描いている。従って平板な説明にしかならない。人間の意識や行動が独自性をもちつつ物質的諸現実との関わりで説明する有力な方法として統一論を云うので，この点をつめていくことが全社会史的考察になるのではないか。

唐木　先の加藤氏の資料理解だが，グラフでは交通・通信の発達が直線的に描かれている。スピードと距離で図解してあるがこれは量的変化の問題だ。１９世紀の航空機関，情報通信・電波等はそれまでのものと違い質的な変化を示していると考えられる。人間が移動せず情報や物を移動させるという質的転換だ。早川氏の云う資本のスポーツ戦略はコミュニケーションによるスポーツへの侵出だ。新しいスポーツのあり方に着目した利用の仕方だ。グラフから質的転換をどう読みとるかだ。

伊藤　経済思想史的に説明すると同時にその背

後にある科学史的変化にコミュニケーション手段の変化を見ることが必要。１９世紀はまさに通信と制御の時代である。その意味でスポーツ上，通信と制御をどうみるかが重要になってくる。

唐木　スピードと馬力のスポーツ・体育からスピード・馬力を互いに協力してコントロールするスポーツ・体育のあり方になってきているのか。

伊藤　経済思想史的・政治史的接近よりも科学史的接近の方がその時代時代の諸現実を適格に再現できるのではないか。だからスポーツ文化史が科学史研究の蓄積と方法をもつということで，学ぶというよりも関連をもつという提起をしたのだ。

司会　では討論の柱を確認しておきたい。

(1)スポーツの社会史像の明確化と方法（論）の深化，(2)諸科学研究と先端科学の成果の関連で何をどう位置づけておくか。その際摂取する共通のネットワークとは何か。(3)コミュニケーション論のとりくみあるいは科学史との関連でスポーツを総合的，多面的にどう解明していくか。

唐木　(1)と(3)は同じように思われる。共通に確認しておきたいが，国民スポーツ研究の一環であり，昨年に引き続く発展の段階として理解しておきたいが。

上野　その発展の段階が本当にそうかの確認をする必要がある。

内海　社会史それ自体がテーマに成り切っていないのではないか，国民スポーツ研究という点で。唐木提案が共通の確認の上でなされている訳ではないのでは。

唐木　昨年の報告では社会史にカッコがぬけてしまった。スポーツの社会史はカッコを入れておくことだ。(1)はそう理解しておきたい。

司会　では三つの柱に入って行きたい。

唐木　①先端諸科学を国民スポーツ研究に適応することの是非について。

国民スポーツ研究の意味（今日どう条件づけられているか），スポーツ実践の意味（欲望の充足の意味）を確認し，人間と文化を変化させる契機をどこから摑んだらよいかが基本に据えられている。そこでスポーツ実践の変革の法則を見定めること，発見することから歴史的にみていくことが重要となる。過去－現在－未来と人間と文化がどう変革していくのかをみないと今何をなすべきかがみえない。そこで昨年社会史を提起した。ところで社会史の把握だが，浜林氏は社会史を全体史（フランスのアナル派に代表される）の文脈でとらえ批判する。過去を独立したものととらえ現在との異質性を特徴ずけるからであると。しかしこの理解とは違って社会史の見方は情報論やシステム論の考え方に近い。今日の状況は科学の成果が全生活を支配している（フィードラー）。この科学の発展の視角から過去をとらえることで有機的関連をもたせられる。その点で全体史は単に一つの固まりではなく，次の時代につながる内容をもっている。システム論は外部環境とのつながりをもつということからこの方法を社会史の克服手段として採用した。昨年のは浜林氏のいう全体史だった。

上野　歴史的動因は何か。社会史はこの点が不明だ。過去から現在を動かすものが消えてしまう。史的唯物論の命題が消える。システム論，情報論の主体が明確でない。

司会　この問題は引き続き検討していくが次の二つ目の柱に入りたい。

上野　システム論の有効性の判断やその問題意識をもう少し説明して欲しい。

唐木　社会史の捉え方が６０年代から出てくるがそれは現状の展望を失った一定の危機論と結びついてイデオロギー的主張にもなりうるが，これとは別に，５０年代から急速に始まる遺伝子工学や情報工学などの物的基盤をもつものとの関連やその反映によって社会史が出てきているのではないかとも考えられる。すなわち情報科学やシステム工学の考え方や見方を歴史的に見る方法として応用し社会史の限界を乗り越えようとしてきたのではないか。その限りでシステム論をみていく。

上野　その場合，発展や理論の中には無視して

もよいものがあるはず。その区別はどうするか。

唐木　早川氏がいうようにスポーツ・コミュニケーションとかスポーツ戦略を見ていく場合，単に今日だけを見るのではなく，産業革命の時代から徐々に蓄積されてきているとすれば，スポーツコミュニケーションとか情報の観点で歴史を見直してもよいのではないか。エネルギー・パワー論だけでみるのではなく，現在を見直すためと歴史認識を見直すためにも。

藤田　上野氏と同じ問題意識だが。スポーツの社会史を考えていく時にその方法としてシステム概念を用いてみようということなのか。有効性を確かめてみようというのか。

唐木　社会史のプラス面とマイナス面，科学・システム論のプラス，マイナス面それぞれをつき合わせてプラス面を統合していくことで歴史家の見方や考え方を広げているのではないか。システム論の有効性をここに見い出している。

上野　歴史と科学の結合は社会学の中でも着手されている。ハーバーマスやルーマンがそうだ。彼らはコミュニケーション理論を展開している。ただ，そこでの史的唯物論批判は問題だが。

司会　もう少し具体的な問題に入っていきたい。伊藤氏の報告に関わって。コミュニケーション論や科学史とスポーツの関係で。

上野　スポーツ認識やスポーツ史の研究方法で経済思想史よりも科学史と切り結んだ方がより重要だという伊藤氏の指摘は重要だと思う。

唐木　先行研究の位置づけと評価について，伊藤氏は日本の現水準は一面的であると評価しているが，この水準を延長したり，多面化すれば克服されるのか。それとも出発点で違っているのか。上野氏の発言と関連してどうか。またヴォールの研究をどう位置づけたらよいのか。

上野　唐木報告の中で技術史観に言及しているがこの点と伊藤さんとの異同についてどうか。

伊藤　システム論の社会史への導入はシステム論それ自身が変革の科学という他の諸科学との関連を見失うと生産力理論だけになる。教育学でいうとブルーナー理論と同じだ。

そこで科学技術論を導入して科学技術革命にまで広げてみるとき，コミュニケーション論をもとに社会史的なものに一つのモーメントを見い出せるのではと考える。

質問の核心部分だが，産業革命の理解の仕方が部分的一面的把握では不正確になる。経済学批判序説にある土台と上部構造に関する定式にあてはめてスポーツ史学はこれをどのように受けとめてきたか。科学的スポーツ史学を構築するために。その意味でははじめのボタンのかけ違いといえる。科学史の意図は連関にある。スポーツと社会を文化を媒介に考察する場合この連関で考えることが必要。科学史的な追求は政治・経済の諸変化に波及していく構造や性質をもっているからだ。スポーツ文化の真の意味での自然科学的技術科学的解明の徹底に立ち戻ることで社会諸科学との連関が明確になる。

上野　「コミュニケーションの広狭両義な把握」ともう一つの中村氏の評価をめぐって「空・時的社会史へ」云々についての説明をもう一度。

伊藤　前者は佐藤毅氏の「現代コミュニケーション論」にヒントを得ている。通信・交通・運輸の変化を社会的コミュニケーションとし，スポーツ分野でのコミュニケーションを狭い意味でとらえる。それを氏はラグビーのパスにおける意味として説明する。社会的コミュニケーションの変革とスポーツ，スポーツマン組織の変化の過程を統一することが政治史的，経済史的諸変化に行きつく基本になる。この観点が不正確であったり，関係がないとすると歴史上の人物や諸事象の記述が変わってくる。

中村氏の叙述は鉄道が敷設されたところで終っている。空間的広がりは説明されているが時間の点が分離している。スポーツ上の時間と生活上，物理上の時間の統一がみえていなかったということだ。文化における自然，人間と文化の基本的関係を見直すという観点からも迫ることが必要だ。

（文責・早川武彦）

「研究年報１９８３」付加・訂正表

○付加（図表の引用文献は下記による）

p 16　表１、p 17　図１――加藤秀俊「空間の社会学」

p 18　図２、図３――Ｗ．シベルブシュ「鉄道旅行の歴史」

p 19　表２――小池滋「英国鉄道物語」

p 19　表３――中村敏雄「スポーツの風土」

○訂正

		誤	正
p 23	右下から１４	２グループ	３グループ
p 〃	右下から１２	３グループ	２グループ